



- 皆さんは「〇〇の七不思議」という言葉を耳にされると思いますが、ここでは本校に関する七不思議について紹介したいと思います。今まで、先生方や在校生や卒業生の皆さんから質問を受けたことを中心に紹介してみます。
- ①「校地」が四回も変わった理由は
  - ②「卒業証書授与式の回数」は何回が正しいか
  - ③「女子が入学した理由」は
  - ④「校訓」が特にならないのは
  - ⑤「プールの中央部が結構深い」理由は
  - ⑥最初の「校歌の歌詞と現在の歌詞の一部が変わっている」理由
  - ⑦「東大・京大」に進学された卒業生がおられたのは本当か

皆さんは「〇〇の七不思議」という言葉を耳にされると思いますが、ここでは本校に関する七不思議について紹介したいと思います。今まで、先生方や在校生や卒業生の皆さんから質問を受けたことを中心に紹介してみます。

まず、校地が、西之端→入江町→名池山→千畳原（現在の場所）と変遷していますが、最初の場所は余りにも手狭な所（役所跡）で運動場もなかったため、現在の王江小学校付近の風光明媚な高台に移ったのですが、昔の下関駅が現在の下関警察署付近に出来ることになったので、埋め立て工事のため立ち退き、現在の名慶中学校付近に移りました。しかし、大正十一年の学校大火災のためほぼ校舎が焼失した関係で、現在の千畳原に移りました。当時の千畳原は山地で平たく整地して本校校舎が昭和の初めに完成しました。その後隣に現在の下関西高校（本来は現在の下関南高校の予定でしたが、女子校のため当時男子校であった本校の隣はまずいとの判断で急遽男女共学校の同校）が入ってきました。当時はそんな世相であり今では考えられない理由ですね。次に、創立百三十五周年を昨年

迎えた本校の卒業式の回数は、百三十四回でしたが、単純に考えると創立年数から一を引いた回数では合わないことになりました。水い歴史の中で、開校当時は年二回卒業式を募集して入学させて年二回卒業式を行った時期が約三年間あったことと戦時下の繰上げ卒業など現在では考えられない事象があり卒業式も随分複雑な変遷を経ていきます。私なりに検証した結果、現在の回数で正しいと思われまます。

次に、開校当初から男子校であった本校に女子が入学した理由は、戦争にあります。戦時下の国策として当時の商業高校は、工業高校が農業高校に替わるように命じられ、どうしても商業高校を存続するならば女子も入学すること、特別に西日本本校だけが単独の商業高校としての存続が許可されたのです。詳しくは、下商物語の第二十一話をご覧下さい。

校訓については、古くから校歌の歌詞「才智・武士道・心の誠・雄々しき気力・堅忍持久など」と特色ある現在のクラス名（仁・義・礼・智・信・和）呼称が以前から校訓代替にもなっているから特に明記していません。なお、クラス名（由来・意味）については下商物語第三十一話をご覧下さい。

次に、プールは昭和四十九年の創立九十周年記念事業の一環で造られたのですが、恐らく授業で水球を行う予定があったらしくそ

の結果中央部の水深が1m70cm程度の深さがあります。特に比較的背景の低い女生徒は途中で止まると溺れそうになるから必死で泳ぐのではと思います。結局、水球の授業は実施されなままですが、校歌の歌詞が違う箇所は一番の校地の場所変更（一目に望む名池山ここに一目に望む千畳原の丘に）に伴うことと四番の世の「荒海」→「荒波」となぜか歌いやすいように変更されています。調べてみますと、戦後このように変更されているようですが、作詞をされた佐佐木信綱先生は四番についてはビックリされた事だと思えます。

最後に、明治・大正期に本校から上級学校（山口高商等）現在の下関大学）に進学され、さらに「東大・京大」に進学された方は記録によると少なくとも東大が三名、京大が六名はおられます。また、東京高商・神戸高商・慶応義塾・早稲田大学など多数進学されていたようです。現在とは教育制度が随分違いますから一概に比較はできませんが、明治後期から大正期にかけてかなりの優秀な学生が学ばれておられたのは間違いないようです。卒業生で北海道大学や同志社大学の教授として活躍された方々もおられたようです。

水い歴史と伝統がある本校にはまだまだ色々な不思議なことがありますが、記録の大切さを改めて感じていきます。そのような思いから筆者が作成した「下商に関する本①・②・③・④」を六月頃に完成して万古館「小田文庫」や学食に置いて自由に閲覧できるようにしていますからどうぞご覧下さい。生徒の皆さんが知らなかった下商に関する意外な事を知るかも。

